

第2章 基本構想

第1節 お茶のまち100年構想

～今、なぜ百年もの長期構想が必要なのか～

お茶が産業として静岡市に大きく関わってきたのは、明治時代以降であり、輸出拠点が横浜港から清水港へと移ってから、加速度的に拡大していくこととなりました。安西（葵区）には、お茶の再製工場も次々と設立され、横浜や神戸の外国商社の多くも支店を置くようになったことから、国際商業都市としての様相を呈することとなりました。加えて、お茶の輸送のため静岡と清水を結ぶ軽便鉄道（現在の静岡鉄道）の開通は、関連産業を興隆するとともに、都市化を促進し生活環境の質的な向上に寄与してきました。

しかし、今、日本を代表するお茶の産地、お茶の集散地である静岡市をめぐる環境は、農業としての生産現場をはじめ、ライフスタイルの変化に伴う消費の多様化、流通構造の変化など、大きく様変わりしました。さらに今後は、少子・高齢化の進行に伴う人口減少が避けられず、時代はすでにこれまでの経験則では計ることのできない時空間へと突入しています。

こうした中で、これからも静岡市が産業としてのお茶が栄え、日常の生活・文化の中にお茶が生き続け、誰もが感じる“お茶のまち”であり続けるには、場当たりの対処療法ではなく、歴史に学びつつ遠い将来を見通したビジョンを描き、そこを羅針盤の基軸として着実に歩を進めていくこと、次代へと思いをつなげていくことが必要と考えます。

時代とともに人々の生活は刻々と変化し続けますが、急峻な山々で営まれるお茶づくりは、簡単に姿を変えることができません。だからこそ、百年という長いものさしでとらえたもの、様々な荒波を受けても時代という大海原の中で行き先を見失うことのない、わたしたち市民の心の目印ともなる羅針盤が必要であると考え、超長期的な「静岡市お茶まち100年構想」づくりが進められました。



第2節 「お茶のまち静岡市」のめざす姿

1 お茶のまちづくりの理念

交わり、学び、伝え、創ろう

先人が、脈々と作り続けてきたお茶。その努力によってお茶は、静岡市を代表する地域資源となりました。ですから、その価値をさらに高めて、後世に伝えていくことは、現代を生きる私たちに課せられた責務ともいえます。

お茶の歴史・文化を次世代に伝えつつ、先人の知恵に学びながら、お茶を作る人、伝える人、楽しむ人が交流（協働）し、時代の要請に合った新しいお茶の価値・魅力を創造していくことが重要です。

そこで、「交わる」、「学ぶ」、「伝える」、「創る」を、世代が変わっても変わることはない、お茶のまちづくりの理念とします。

「交わる」

お茶を作る人、伝える人、楽しむ人が、もっと交流・連携することにより、お茶も人々の関係も進化させていきます。また、産地と市街地、さらには市内外の人々が、互いに持つ資源や思いを起点に交流を促すことで、静岡のまちに大きな流れが生まれます。

「学ぶ」

お茶は人と人を取り持ち、人の心を癒すことのできる貴重なもの。人々の健やかな毎日を支える大切なもの。作る人、伝える人、楽しむ人も茶の持つ神秘の力を学びます。また、お茶を育て、作り、人々に届けていくこと、この繰り返しを未来永劫引き継いでいくためには、そこに携わる者自らに学びの姿勢が必要です。

「伝える」

先人が築き上げた茶産地・お茶のまちとしての確かな記録。お茶作り・まちづくりへの思いを確実に継承することが必要です。また、先人たちが競い、自然と共に、また生活の中で極めてきた静岡市のお茶の魅力やその背景も、茶畑のある光景とともに伝えることが必要です。

「創る」

社会の状況や私たちの生活は、日々変化しています。その中で、互いに知恵を出し合い、いつの時代も人々の暮らしに密着する、新たなお茶の姿、お茶のある生活を創り上げていくことが必要です。

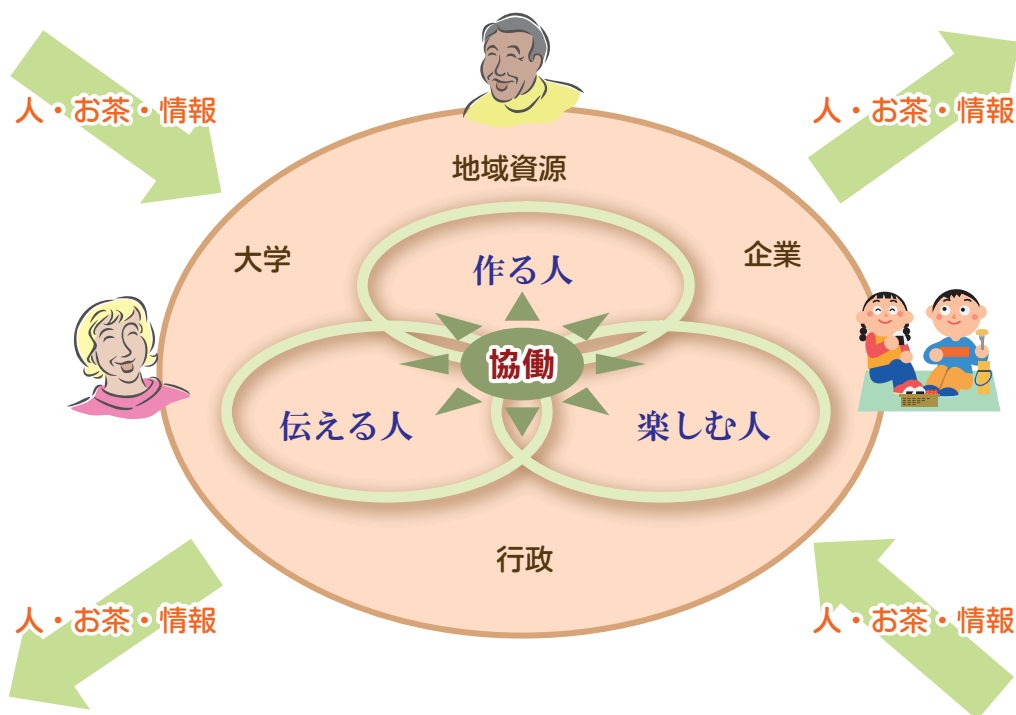


世界中のだれもがあこがれるお茶のまち

～幸せな笑顔で満ちあふれた産業文化創造都市～

静岡市は、良質でおいしいお茶を作る産地としてその名を知られるようになり、国内の他産地からもお茶が集まってくる集散地ともなり、名実ともに日本屈指の茶どころとしての地位を確立することができました。

これからは、こうした先人の志や技量を継承しつつ、作る人（茶農家や茶問屋）と楽しむ人（市民）、そして両者をつなぐ伝える人（茶問屋や小売店、日本茶インストラクター）の協働により、魅力あるお茶づくりは無論、さらに、お茶を通じた心やすらぐ生活空間があり、笑顔を求めて人々が集まってくるまち、そして、まちの内にも、まちの外とも、人・お茶・情報の交流が絶えることがなく、その交流がまた新たな笑顔を生み出していく — そんなお茶を通じた新たな価値が次々と創造される“お茶のまち静岡市”を目指します。



3 将来像に向けての基本方向

100年後の将来像「世界中のだれもがあこがれるお茶のまち」に向けた軸となる三つの柱を次のように定めます。

<全体像>

世界中のだれもがあこがれるお茶のまち

～幸せな笑顔で満ちあふれた産業文化創造都市～

人々の心を引きつけるお茶をつくるまち

お茶が生活・文化の一部となり心やすらぐまち

お茶を中心に交流の輪が広がるまち



< 基本方向の考え方 >

人々の心を引きつけるお茶をつくるまち

茶農家・茶商の洗練された技術に、これまで直接関わるのが少なかった消費者としての市民の力をかみ合わせることで、地域の個性を活かしつつ市民も自慢したくなるお茶が次々と生み出されるお茶のまちを目指します。

特に中山間地域は、これまで、立地から生産効率が低く、出荷時期が遅いことで、品質が価格形成や経営に活かされない傾向にありましたが、市民自らが自慢したくなるお茶づくりが広まることによって、市場流通の中に埋もれることのない価値を生み出すことができると考えます。

こうした魅力あるお茶をつくるための基盤として、「協働の歯車」の核となっていく生産、流通における人づくり」や、「産地が次代へしっかり継承されるための“働きやすい茶園づくり”、“お茶づくりの担い手確保”などの仕組みづくり」を推進します。



お茶が生活・文化の一部となり心やすらぐまち

経済発展の代償として現代に生まれた“ストレス社会”や“生活習慣病”、そして“ゆとり時間の喪失”—これから私たちや私たちの子や孫が迎える時代は、自然環境の変化や生産人口が減少していくことなどから、より心への負荷が高まることも予想されます。

だからこそ、先人が見出し、代々受け継がれてきたお茶の持つ様々な力—「人々の心を癒す力」「人々の健康を育む力」「人々の心をつなぐ力」—を100年後も享受できるまちであるよう、「これまで培われてきた茶文化や歴史の未来への継承」や「これからの社会生活になじむ新しいお茶のある暮らしの創造」、「次代の担い手であり、継承者として子どもたちに伝える」ことに取り組み、いつの時代も常にお茶を身近に感じられるような風土づくりに努めます。



お茶を中心に交流の輪が広がるまち

お茶は人々の喉を潤してきたばかりではなく、家族の食事の間に会話を生み、大切な友人を和菓子とともにもてなし、心と心をつなぐ大切な役割を果たしてきました。茶道から生まれた“一期一会”の心は、決して“茶道”という特別な世界だけのものではなく、私たちの日常生活のありとあらゆる場で生きるものです。毎日顔を合わせる家庭でも、学校でも、職場でも、同じ場面は二度とありません。だからこそ、その時、その時の出会い、場面に一所懸命相手に尽くそうとする心、それが一期一会です。

世界で一番“一期一会の心”が深く、広く浸みわたったまちづくりを進めることにより、お茶を介したコミュニケーションが次々に網目のように広がり、内外との交流活動が生まれ、経済活動の盛んなまちを目指します。

そのようなまちづくりに向け、「全国・世界に向けた情報受発信」「お茶を感じる街並みづくり」「静岡市のお茶」ファンの掘り起こし」の三つを柱とし推進します。

